

清本修身教授のご定年にあたって

清本修身教授は2008年3月末に定年を迎えられます。清本先生は大阪で生まれ、大阪の高校を卒業し、東京で大学生活を送った後、1967年に読売新聞社に入社されました。入社後は主として外報部（現国際部）に籍を置き、アフリカ、中東、北米、南米、アジア、欧州など文字通り世界各地で支局長や総局長の要職を経験され、2003年3月に論説副委員長で退職された後、同年4月に立命館大学国際関係学部へ赴任されました。

読売新聞社時代の36年間と比較すると、国際関係学部での5年間は短かったかもしれませんが、直接教えを受けた学生や院生だけではなく、仕事や研究あるいはアフター・ファイブを共にした教職員も、時計の針ではけっして測れない、貴重で刺激的な時間を清本先生と一緒に過ごせたことを、心から嬉しく幸せに思っております。

清本先生は一見すると「こわそうで」、実際に話していても最初の数分間は本当に「こわい」のですが、いつの間にか清本先生の雰囲気ですっかり飲み込まれている自分に気づくことがよくあります。最初に感じていた「こわさ」が消え、独特の清本「節」に頭と心が自然に調子を合わせ始めているのです。不思議な体験ですが、私にとっては清本先生がなぜ学生や院生の間で人気が高いのかを得心する瞬間でもあります。威厳の中に人を引き寄せる魅力を備えている「すごい」先生です。

清本先生が本学部で担当された主な科目は「国際ジャーナリズム論」、「国際関係資料研究（論文作成）」、専門演習また研究科では「メディアと国際社会研究」、特別演習（研究指導）などでした。いずれも人気が高いだけではなく、深い内容を備えた素晴らしい授業であったことは、受講した学生や院生の証言からも明らかです。しかし、こうした定番の授業以上に清本先生は自ら築かれてきた幅広い人的ネットワークを、私たちの教育と研究のために惜しみなく提供し開放して、学部と研究科の発展にご尽力されました。清本先生がいらっしゃらなければ掴むことができなかったチャンスを得て、学びや研究にチャレンジし、社会に巣立っていた学生や院生は少なくありません。学部を代表して深く感謝申し上げる次第です。

この3月末で恒心館4階の研究室から清本先生は去られますが、国際関係学部はいつでも清本先生のお越しを歓迎いたします。定年は一つの区切りですが、清本先生と国際関係学部の縁は永遠だと信じております。あっという間に過ぎた5年間でしたが、清本先生とご一緒できた一日一日はとても充実していました。今後とも私たちが目指すグローバル・リーダー育成のために、多様な機会を通してご協力賜りますようお願い申し上げます。

末筆になりましたが、どうか健康には留意されたうえで、引き続き新年度から衣笠キャンパスで開催される新しい学びの企画にご参加賜れば幸甚です。お待ちしております。

ありがとうございました。

2008年3月

立命館大学国際関係学部長 高橋伸彰